

屋久島の「まつばんだ」考

—琉球音階の北上か—

杉 本 信 夫

南島研特別研究員

琉球音階、いわゆるドミファソシドの音階による民謡やわらべうたの北限は、鹿児島県の沖永良部島というのが、これまでの定説である。ところが薩南諸島の一番北部に位置する屋久島に、まぎれもない琉球音階によるうたが定着していたのである。

屋久島の古いうたに「まつばんだ」というのがあるということは、かねてからきいていたが、その実体は知らなかった。これまでの唯一の音楽的資料は、久保けんお著「南日本民謡曲集」(音楽之友社、昭和35年刊)のなかの一曲である。しかし採譜をみると、音律は普通の民謡音階でできているので、特に気にとめることもなかったのである。また、もとうたは、NHK鹿児島放送局提供としてのみ記載され、演唱者名、伝承されてきた場所、録音時については一切不明である。のちに久保けんお氏にお会いし、このことについておたずねしたところ、昔の古い録音盤から採譜しただけで、他はわからなかったとのことであった。

その後、昨年(昭和55年)の5月に発行された、「日本民謡大観、九州南部・北海道篇」(日本放送協会)に、「まつばんだ」の楽譜が三曲収録されているのがわかり、調べてみたがやはりいづれも民謡音階によるものであった。ここでは「まつばんだ」を「松番田」と字を当て、一曲は昭和14年に上屋久町の一湊で、寺田きよ(71歳)演唱による録音、他は昭和27年に、十島村の中之島と臥蛇島(現在は無人島)の地元有志による録音とされている。

また下野敏見著「吐喇列島民俗誌第一巻、悪石島・宝島篇」(文照社、昭和41年刊)には悪石島・平島の「まつばんだ」の歌詞が記されている。

屋久島の上屋久町教育委員会より「上屋久町誌」編纂に際して、「わらべうたと民謡」の項を依頼され、わたしは昨年(昭和55年)の7月に上屋久町の全部落をくまなくまわって、古老から昔のうたを収録したが、「まつばんだ」については伝承者はもはや絶えてしまっていた。ところが一湊と吉田の部落で、80代の古老から、「あれは沖縄風のものだった」ということをきき、驚くと同時にこれはなんとかして究明しなくてはと思ったのである。

まずわたしの所属している鹿児島短期大学附属南日本文化研究所に報告したところ、研究所が行なった、13年前の屋久島総合学術調査(昭和42年7月)のときの、民謡調査のテープが残されていることがわかった。この時の調査報告は、「南日本文化」創刊号(昭和43年刊)にあり、原田宏司氏によって「屋久島の民謡について」が報告されているが、その第二章に「ハイヤ節」と「まつばんだ」という項目がありながら、「まつばんだ」については何ら考察がなされていない。ただ「島固有の最も古い民謡とされていること」「最近ではほとんど歌われる機会のないこと、歌う技術の難しいことから現役の歌唱者はもういないのではないかと心配していた

が、安房・尾之間・吉田の3個所で、100歳・89歳・91歳といった古老から聞くことができた」とのみ記述されている。原田氏のテープの分類表によって、それが安房では酒匂シゲさん、尾之間では日高ミヨさんであることが判明したが、吉田での演唱者の記入はなく、またテープを調べてみても吉田での「まつばんだ」は欠落していた。

13年前に録音されたテープによって、わたしははじめて「まつばんだ」の音をじかに知ったのであるが、それはまぎれもなく琉球音階であり、誰が聴いても沖縄のどこかの島の古老がうたったものと見まちがうほどのものである。とくに安房の酒匂シゲさんのうたは、高齢にもかかわらず、非常に音律が正確で、しかも録音状態もよく採譜にもっとも適している。早速これらをカセットテープにコピーし、屋久島に渡った。

屋久島は北側の上屋久町と南側の屋久町に行政区が分かれている。安房も尾之間も屋久町の方である。屋久町役場で、酒匂シゲさんと日高ミヨさんの戸籍を調べてもらったところ、すでにこのお二人は昭和44年に亡くなっていた。酒匂シゲさんは明治元年生まれ、日高ミヨさんは明治21年生まれであった。

尾之間に日高ミヨさんの妹さんがおられるときき、訪ねてみたがもう耳がほとんど聞こえず、録音してきたテープも理解できなかった。幸いにしてミヨさんに子守りをされたおばさんに会い、テープを聴いてもらったところ、このとおりであったという。しかしここでも、もう「まつばんだ」をうたえる人はなくなっていた。

ところがこうして13年前のテープを持って各部落を歩いているうちに、屋久島の南西のはずれの栗生の92歳のお婆さんが、耳にテープレコーダーをくっつけるようにして聴きながら、「昔、ここにも同じのがあったよ、踊りもついていたよ」と語ってくれ、そして安房に一人だけまだうたえる人が生きている筈だと教えてくれたのである。

わたしはよろこび勇んで、翌朝そのお婆さん・若松シマさん宅を訪れた。シマさんは一人で朝御飯を食べようとしておられるところであったが、突然うたをたずねて訪れたわたしを迎えて、大喜びですぐその場で元気よく「まつばんだ」をうたってくださいだったのであった。なんとシマさんのお年は94歳だという。シマさんのうたも酒匂シゲさんと同じく、まさしく琉球音階である。わたしは生きた「まつばんだ」にはじめて肌で接し、感動と興奮で胸がいっぱいになってしまった。そこでシマさんから、「まつばんだ」についての話などもくわしくきくことができたのである。

このあと別の機会に屋久島を訪れたとき、偶然安房の泊伝市さん演唱による「まつばんだ」のテープを手に入れることができた。原盤は泊さんが昭和31年に何かの用件で上京されたときに、屋久島出身で東京在住の永綱一丸氏が、ポリドールの友人に頼み、泊伝市さんが数少ない「まつばんだ」の伝承者なので、78回転の円盤に録音しておいてもらったものである。それを郷土史を研究しておられる上屋久町楠川の山本秀雄さんが、カセットテープにコピーして持ち帰ってこられたばかりのところに、わたしがお会いしたのであった。泊伝市さんについては、「まつばんだ」の名手であったときいていたが、今は高齢で入院中とのこと、うたがきけることは半ばあきらめていたところに、昔の録音であれ聴くことができたのは幸いであった。これ

も酒匂シゲさんのうたと全く同じ琉球音階であり、見事なうたいぶりである。

このほか、鹿児島県の南日本放送局の御好意で、資料室に保管されていた、悪石島・宝島・安房での「まつばんだ」をコピーさせていただいたが、悪石島・宝島のいずれも旋律的骨格は、屋久島と同じく琉球音階であり、安房での録音は、酒匂シゲさんのものであった。

またわたしが「まつばんだ」を追っていることを知った、鹿児島県の黒島の日高重行さんが、わざわざ島からもってきて下さったテープも、同様の骨格をもつ琉球音階による「まつばんだ」であった。黒島ではこれに婦人たちの踊りがついているという。

このようにわたしが直接耳にした「まつばんだ」はすべて琉球音階である。民謡音階によるものは、前記資料の採譜以外には知らない。

「まつばんだ」の語源等については、久保けんお氏の「南日本民謡曲集」では、「めでたい唄で、平家が持ってきたと伝える。山まつりに用う。」「三島村や南薩および離島にもあり川辺郡には松原田(まつばんだ)という地名もあるが、これと関係ないか、屋久島では松番田と書き、他地方では松蕃田と書く。」とある。「日本民謡大観」では、昔屋久島に薩摩の番所がおかれていたころ、「松葉の座」という大広間があり、ここに島の美女を集めてうたや踊り、酒席の相手をさせていた、そこでうたわれたうたの一つが「まつばんだ」となった、という宮之浦の岩川貞治さんの説をとっている。わたしが岩川貞治さん(明治37年8月15日生)に直接お会いして話をうかがったところ、屋久の方言では、ザがダと発音されるので、「松葉の座」が「松葉ん座」「まつばんだ」となったと言われていた。下野敏見氏は岩川説をとらず、「吐^ふ 咖^か 喇^ら 列島民俗誌第一巻」のなかで、「一人娘をマツバンタにやるなナー、前はヨー、お田^ふぼで深^ふござるなー。……この歌詞のマツバンタは『山川の松番田である』と坂元新熊(杉本註、悪石島の当時81歳の古老)氏が言った。即ち山川港を中心に歌われていたこの歌が船乗りたちによって南の島々に伝播したとみるのが妥当であり、マツバンタは開聞山麓の松番田を歌った歌詞であるところからマツバンタと呼ぶようになったと思われる。」と述べられている。

語源的には以上の諸説があるが、いずれもことばを中心とした考察である。民謡であるからには音楽的側面からも検討する必要があるだろう。

次にわたしが収録した各地の「まつばんだ」の歌詞をあげる。ただしいくつかの即興的歌詞で、すでに演唱者が亡くなり、全体の歌詞の意が判明しない分は割愛した。なお、「まつばんだ」には、息つぎの途中とおわりの二個所に、「チュイサヨ」「アーチュイサヨ バイサヨ」あるいは「チュイサヨ」「アーチュイチュイ」「チョイサヨ チョイサヨ」「チョイサヨ バイノ」等のハヤシが適宜に挿入されるが、これは、はじめの歌詞にのみ記入し、あとは省略した。同一演唱者でも、ハヤシことばはその時々によって変わるものである。また地域別に「まつばんだ」の歌詞を列記したが、同一歌詞で複数の演唱者がうたう場合もあるので、演唱者名は最初にあげるだけにとどめた。

屋久島(熊毛郡屋久町・安房・屋之間)

演唱者 酒匂シゲ(明治元年4月13日生、昭和42年7月20日録音)

若松シマ(明治20年3月27日生、昭和55年8月18日録音)

日高ミヨ(明治21年4月1日生, 昭和42年7月20日録音)

泊 伝市(明治26年11月1日生, 昭和31年録音)

- サー 屋久のお岳を おろかにゃ思うなよ 金のな チュイサヨ
倉よりゃ なお宝な アーチュイサヨ バイサヨ (以下ハヤシ省略)
- 屋久のお岳の シャクナゲ花よな 年中な 薔^{つばな}で 一度咲すな
- 屋久の八重岳 約束したがな 親がな 許そか そこは知れぬな
- うれしゅめでたの 若松さまよな 枝もな 栄える 葉も繁るな
- 田舎なれども 安房の港よ 出船な 入船 帆かけ船な
- お舟魂さまよな しげくな 旅をば さし給えな
- 船も早^{はよ}かる 嵐もよかるな 旅のな 積荷も なおよかるな
- 花の盛りは 三月四月よ 五月な 長^{ながし}雨で すたれ花^{ばな}よ
- 永^{**}田田もよい 水まじゃよいがよ 水のな 沙汰かよ 嫁女^{よめじよ}まで
- 此^{こゝ}の座敷は 祝いの座敷よ 黄金な 花咲す 金^{きん}がなるな
- あなた百まで わしゃ九十九までよ ともにな 白髪^{しらげ}の生えるまでな

* 九州一の高さを誇る宮之浦岳(1935メートル)をはじめ霊峰が連なり、山は樹齢三・四千年の屋久杉とともに、島人たちの信仰の対象であった。

** 永田は屋久島の西北のはずれの部落で、美人の多いことで知られていた。

*** 若松シマさんによれば、昔「山ん供養」「嫁祝い」「子ども祝い」などの祝事のはじめに「まつばんだ」がうたわれ、そのあとテンポのやゝはやい別のふしで、数人の婦人が五銭、十銭などを入れた箱を、カサッカサッとゆさぶって音をたてながら踊った。この「まつばんだ」のちらしになるようなうたは、都ぶし音階である。

悪石島(鹿児島郡十島村, 昭和40年8月1日録音)

演唱者 宮永マスキク(明治15年12月7日生) 有川トヨ(明治27年11月29日生)

坂元セイ(明治32年1月21日生) 坂元新熊(明治18年4月16日生)

- 野でも山でも まつばんだでなけりゃな みどがよ のんきは 晴^はえはせぬな
- わしはこの島^{しめ} はじめて出ればな 人もよ 知らんば 名も知らぬな
- 旅の空じゃよ 近^{ちこ}寄^ゆて給^{たも}れな 情よ ある人 親と見るな
- 声が出もさん 薬^{たも}も給^{たも}れな 声によ 釣^つ合^いた 小^こ薬^{ぐすり}をな

○ うれしゅめでたよ 若松さまよな 枝がよ 栄えて 葉も繁るな

○ 祝いを祝い この家の家^えがな 空にゃよ 祝いの 鶴が舞うな

宝島(鹿児島郡十島村, 昭和40年7月25日録音)

演唱者 坂元常助(明治21年2月22日生)

○ 待つがよいかよ 別れがよいかよーいやーなよ 別れより 待つがよいよ

○ うれしゅめでたの 思^{おも}事^{こと} 叶^こた^たよ 年中よ 思^{おも}事^{こと} 今叶^こた^たよ

○ 月のひょいと出を 夜明けと思てよ 様^{さま}をよ 返して 気にかかるよ

黒島(鹿児島郡三島村大里, 昭和55年8月録音)

演唱者 日高キヤ(明治29年7月23日生)ほか

1. まつばんだも だんだんござるよな 永田(を)まつばんだ 調子のよかな
*

2. 屋久に下だるなら せんずして下だれよな 麻^{**}のな 濡れ綱も 手にゃ取らぬな
(?)

* 永田は屋久島の西北の部落名。黒島の方角でもある。

** この部分以下を二度くりかえす。なおこのうたにはハヤシが入らない。

*** 八朔(旧8月1日)の日に、代々神事を行う家の庭(タユ)で、婦人たちが二列になって、それぞれ 扇子をもってこれをうたいながらゆるやかに踊る。

次に採譜楽譜をもとにして、「まつばんだ」の音楽性について考察してみたい。採譜はもっとも演唱の正確な、酒匂シゲさんのうたをもとにし、他を参考にした。

旋律は完全な琉球音階である。うたいはじめの低い音から、1オクターヴと完全5度上へ向けて、広い音域にわたって朗々と自分のおもいをうたい上げなくてはならないので、相当の音域と音量をもった人でないとうたえない曲である。またこの旋律の山が一曲に二回でてくるのである。

リズムは、このうたが共同作業うた系でなく情歌の系統なので、元来は拍節的でなくてもよいものである。しかし酒匂シゲさんのうたは、譜にみるようにリズム的にも明解である。他は人によって、フレーズの切れ目や、装飾的小ぶしのところなどで、自由拍的にのばされることがある。

このような、琉球音階による音律、旋律性、リズムの特性を骨格にして、“祝い歌”としての一定の歌詞をうたったあとは、自由に即興的に自分の“おもい”をうたいあげるところなど、「まつばんだ」の音楽的性格はまさに沖縄のスンカニー、ナークニーと相通じる“情歌”であり、それが北上したものとわたしには考えざるをえないのである。

以上にみるように、音楽的にはこの「まつばんだ」は、明らかに沖縄・南島系であるが、歌詞や詩の韻律は鹿児島方言を含む大和系である。この二つの相容れない要素が複合したためずらい例が「まつばんだ」である。それが「祝い歌」という形では屋久島を中心に、薩南諸島へと散らばっていったものとわたしは思う。そしてそれぞれの島では、その島の音楽的特性をもった「まつばんだ」が島の人々の生活のなかに定着してうたいがれてきたのである。たとえば、奄美に近い悪石島の「まつばんだ」に挿入されるハヤシは、大島の島唄を思わせるような下降ポルタメント型を取り、宝島の「まつばんだ」にはハヤシはなく、「祝い歌」というより、与那国のスンカニー的情歌の要素が濃厚である。

まつばんだ

屋久島 安房 うた 酒匂シゲ
採譜 杉本信夫

(実音) ♩ = 58

サ - - やくの - お た - - け - - を お ろ - - か - -
 - - - に - お も - - な - よ - - - - - か - - - - - ぬ - -
 - - の な ァイ サヨ くら よ - - - - - り - - な -
 お - - た - - - - - か - - - - - ら な - - - ア ァイ サヨ バイ サヨ

琉球音階
音域

註) この論稿を南島文化研究所に提出した後、小島美子氏から「奄美音楽の諸要素－奄美の音楽文化圏をめぐって－」(人類科学第32集抜刷、昭和55年3月30日発行)が送られてきた。この中ですでに小島氏は、若松シマ、泊伝市さん演唱による「まつばんだ」のテープを、国立民族博物館の音楽データ・ベース・システムにかけ、電算機による自動採譜を行なった結果「屋久島における沖縄音階の存在を立証」されている。しかし小島氏の調査では、中之島の「まつばんだ」は民謡音階であり、「何故屋久島に突然沖縄音階が現われたのであろうか？これがもしも屋久島の人々のベーシックな音階感覚の中に古くからあったのだとするとたいへん重大な問題」と提起されている。わたしは本稿にみるように、琉球音階は屋久島だけとは思われないので、今後の研究資料にしていいただければ幸と考える。